現代の霊性への関心の高まりとその共同体性についての一考察

上　田　直　宏

はじめに

スピリチュアリティあるいは霊性という言葉がキリスト教会においても関心が持たれるようになってしばらくの時が経つが、その概念理解には今も幅と曖昧さが伴っている。現代にいたるこの関心の高まりは、キリスト教の文脈においてはどのような潮流が影響しているのだろうか。本論文は「霊性」という語が西洋プロテスタント教会において広く用いられ始めた 20 世紀半ば以降の霊性に関する関心の高まりを概観しつつ、その共同体性に着目するものである。方法としては、キリスト教霊性に関する宗教史研究を行う神学者フィリップ・シェルドレイクと、霊性と社会問題に深く関わる聖公会司祭ケネス・リーチを中心とした文献研究により、際立ったいくつかの潮流からその霊性の特徴を考察する。

本論文において中心的概念となる霊性について、さしあたって操作的定義を行いたい。シェルドレイクは、「霊性」の語源はキリスト教にあって、キリスト教霊性のあらゆる伝統は究極的には聖書とその解釈に根ざしていると主張する[1]。霊性（spirituality）という語は、ラテン語の spiritualis から、さらに遡るとギリシャ語の pneuma（霊）に由来するが、この pneuma は聖書においては soma（身体）やラテン語の corpus（体・物体）の対語ではないということを認識しておく必要がある。むしろ pneuma は神の霊に反する意味の sarx（肉）に対置する語であり、霊肉の対比ではなく、生に対する 2 つのあり方の対比において登場するものである[2]。このあり方はたとえば、1 コリ 2:15 に登場する「霊の人」に見られるような、神の霊が住みたもう、あるいは神の霊の影響にしたがって生きる人を指す[3]。

キリスト教の視点から霊性について多くの著書を著す心理学者、デイヴィッド・ベ

1　一方で、その時代ごとに特定の文脈で再解釈されたテキストと霊性とのつながりは単純ではないことも指摘される。Philip F Sheldrake, *Explorations in Spirituality: History, Theology, and Social Practice* (New York; Mahwah, NJ: Paulist Press, 2010).p.5.

2　Ibid.p.6.

3　Ibid.p.3., cf., p.13-21.

ナーは霊性についてより広範な定義として「霊性とは意味、神、他者経験に対する人間の探求である」[4] とした上で、キリスト教霊性のエッセンスは「人間の霊が聖霊に深く根ざしている時に生じる神との深い関係である」と表現する [5]。この霊性は以下の 9 つの要素に特徴づけられる [6]。

1. 聖霊の私たちの霊への（Spirit to spirit）召しに応えることから始まる。
2. イエスへの献身と生に対する自己変容的取り組みに根ざしている。
3. 恵みによって育まれるものである。（人の努力によるのではない）
4. イエスを深く知り、またイエスを通して神と聖霊について深く知ることに関わっている。
5. 自己についての深い理解を要求する。
6. 私たちがあるべきだと神が任ずるユニークな自己の結実へとつながる。
7. 苦難の中でその人特有に成長させられる。
8. 他者と神の愛を分かち合い、神の被造物を大切にすることによって現れる。
9. キリスト教共同体の中で祝うことにおいてその真髄が表される。

ここで特徴的なことは、主体は聖霊であって恵みによるものであること、存在であるよりも変容するあり方であること、三位一体の神と自己を深く知ることに関わり、共同体において表現・発現されるということである。これらを踏まえて、本論文においてはキリスト教的霊性を「私たちの自己全体と神との関係、およびそのあり方である」と定義し、それは変容していく過程に結びついており、また共同体の中で発現・表現されるものと理解する [7]。

1．現代の霊性に影響する 3 つの潮流

キリスト教の霊性は各時代の神学と信仰に湛えられているため、本論文においてそれらを俯瞰するには紙面が限られるが、プロテスタント教会の「霊性」という語彙の使用に関しては、第 2 バチカン公会議（1962-65 年）以降の極めて新しいものと言える [8]。

---

4 Benner, *Care of Souls.* p.87.
5 Ibid., p.90.
6 cf. Ibid., pp.94-108.
7 より福音派的な立場にあるマルホランド Jr. はキリストに似た者へと変えられていくこと、他者のための変容であることを特に強調する。M. Robert Mulholland and R. Ruth Barton, *Invitation to a Journey: A Road Map for Spiritual Formation* (Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2016).
8 Philip Sheldrake, *A Brief History of Spirituality* (MA: Blackwell Publishing, 2007). p.3.

したがって本稿では 1960 年代以降の霊性への関心の潮流について検討していく。

シェルドレイクは、20 世紀の霊性を適切に評価・解釈するには時期尚早であることを認めつつ、霊性が注目されるようになった背景として 3 つの出来事、すなわち 1) 特にヨーロッパにおいて制度化された宗教が著しく衰退したこと、2) キリスト教内においても他宗教との間においてもかつて強固だった境界線が侵され始めたこと、3) キリスト教が真にグローバルなものになったことを挙げる [9]。そのような土壌にあって、第 2 バチカン公会議はローマ・カトリック教会にとどまらず幅広くキリスト教全体の霊性に影響を及ぼすこととなる [10]。会議では典礼と典礼に関する霊性、エキュメニズム、すべての受洗者一人ひとりに聖性とミッションへの招きがあることが確認された [11]。これによって霊性は聖職者やローマ･カトリックの修道士のような霊的エリートだけが取り扱うものではなくなり [12] そのあり方は多彩な様相を呈し始める。

この同時期しばしば議論されていたことは、人類の未来は「非宗教」となり、社会は世俗化し、教会の宣教はその状況を前提に行われるだろうということであった [13]。そこに漂う空気には 1) 西洋の確立され制度化された宗教、とりわけキリスト教への幻滅や無関心、2) 超越やリアリティを経験するより深い方法への欲求、3) 政治による解決に対する幻滅と共に平和・正義・人間性の解放と充足への関心の高まりがあった [14]。本論文ではそれらのニーズに伴って生じたとも言える、現代の霊的風潮に影響を与える 3 つの主な潮流についてそれぞれの背景と特徴を追っていく。

1.1 内的探求 ― リトリート・ムーヴメント

既存の宗教への幻滅と関心の低下、サイケデリック運動などを背景に、1960 年代アメリカでは人類の伝統的知恵が再発見されまた再体験されていた [15]。内面への旅に惹かれる人々は自身の霊的ニーズが満たされると思えるものなら何でも、たとえば瞑想のための学校、ペーパーバックの神秘主義の本、ヨガ、そして教会にも注目したが、教会はこのニーズを満たすには準備不足であった [16]。彼らは多様で、多くは薬物使用

---

9 Ibid., pp.173-174.

10 Ibid., p174. ジェームズ・ヒューストンは、現代の霊性小史をたどる上で、公会議の影響を受けてアメリカ・カナダの神学校協議会 (The Association of Theological Schools) がプロテスタント神学教育に霊性教育を採用し始めたと説明している。Biola University, *The History of Spiritual Formation - James Houston and Bruce Hindmarsh,* YouTube movie, 2014., accessed November 26, 2020.

11 教会憲章 5 章。ローマ・カトリック聖座 (the Holy See) see :“Lumen Gentium,” accessed November 26, 2020.

12 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.200.

13 Kenneth Leech, *Soul Friend: Spiritual Direction in the Modern World* (Harrisburg, PA: Morehouse Pub., 2001). p.2.

14 Ibid., p.7.

15 Ibid., p.6.

16 Ibid., p.3.

者でもヒッピーでもなかったが、自分たちの人生の意味や真の自己を内的・霊的に模索しているということにおいて特徴的であった[17]。

このような雰囲気の中、キリスト者もヨガ、禅、瞑想のための学校などの東洋的伝統に傾倒し、自身の歩みに新たな洞察と観点を見出そうとした[18]。たとえばその当時以前に提唱されていたキリスト教的ヨガ、キリスト教的禅が注目され、さらにはマハリシ・マヘーシュ・ヨーギーの提唱したヒンドゥー教のマントラ瞑想法である超越瞑想（TM: Transcendental Meditation）までもがキリスト教の祈りの形式の一つとして展開された[19]。彼らがニューエイジの中心的人物の一人であるマヘーシュの提唱する超越瞑想にも惹かれたことに特徴的であるが、この潮流における第一の関心事は自らの生の意味や目的といった実存的な問いや充足感であったことから、その実践には境界が薄れニューエイジ思想へと接近したと考えられる。

ただし、人々のこのような求めに応じて、徐々にキリスト教神秘主義にも関心が持たれるようになり、『不可知の雲』や十字架のヨハネの著作が再び脚光を浴びた[20]。シェルドレイクが 20 世紀の潮流として挙げるリトリート・ムーヴメントはこの求めにある程度応えてきたと考えられる。リトリート（退修）とは、退き祈るために弟子たちを連れ立ったイエスに関する新約聖書の記述に遡るが、キリスト教の伝統においては、修道制が沈黙・隠棲・観想を通して生涯にわたるリトリートとして実践されてきた[21]。しかしそれは限られた人々のためのものだったと言えよう。20 世紀初頭にアメリカで起こった時点ではリトリートは主にグループで行われ、経験豊かな司祭が指導していた[22]。リトリートと同様の観想的実践として一対一の霊的指導（Spiritual Guidance）も行われるようになった[23]。一人がもう一人に対して案内人、助言者、あるいは同伴者の役割を担うこの実践の伝統はエジプトの砂漠の修道制にまで遡るが、20 世紀初頭には信徒によっても提供されるようになっていた。ただし、霊的指導も当時は少数のためのエリート主義的なものであった[24]。これらが第 2 バチカン公会議後、霊的実践が民主化され、門戸が開かれたことにより、リトリート・霊的指導共に、叙階された司祭や修道会を越えて広くキリスト者がその実践を担うようになった。プレッシャーのある生活を送る現代人にとって、これらに対するニーズはますます高まっており、現代は同じ流れにある霊的同伴（Spiritual Direction）の発展と普及が見られる。

---

17 Ibid.
18 Ibid., p.27.
19 Ibid., pp. 26-27.
20 Ibid., p26.
21 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.200.
22 Ibid.
23 本論文では Spiritual Guidance を霊的指導、Spiritual Direction を霊的同伴と訳す。
24 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.200.

この潮流においてシェルドレイクが指摘するのは、参加者の自己発見的ニーズに応えるために、参加者のみならず指導者も宗教的・非宗教的を問わず幅広い典拠からの知恵を用いた霊的折衷主義となりえる点である [25]。

1.2. イエスと聖霊への回帰 ― ジーザス・ムーヴメントとカリスマ運動

1960 年代末から 70 年代に特にアメリカ西海岸を中心にジーザス・ムーヴメントという福音派的運動が急速に発展した。この運動は明確にある団体が担ったというよりもほとんどが教会外の幅広いグループによって起こったまさに「ムーヴメント」であった [26]。ジーザス・ピープルやジーザス・フリークと呼ばれるこの運動に参加した人々は、第 1 に福音派のグループで単に流行に乗った人々、第 2 に福音派の教会内でカリスマ刷新の影響を受けた若者たちのグループ、第 3 にのちにファミリー・インターナショナルとなる「神の子どもたち」なる、他のほとんどのキリスト者グループをマモンの仲間だと見なすより過激なグループなどによって成り立っていた [27]。このようにジーザス・ムーヴメント内にもかなりの相違が見られるが、彼らは「イエス革命 (Jesus revolution)」の概念において一致していた [28]。それは西洋のキリスト教への反発から、直解的に聖書を解釈し初期キリスト教会の質素な生活への回帰を望むものであった [29]。

この潮流は、新ペンテコステ派（Neo-Pentecostalism）や聖公会司祭デニス・ベネットが異言を伴う聖霊のバプテスマを受けたことを語ったことに端を発するカリスマ運動などの影響を受けていた [30]。これらの運動は、ペンテコステ派に留まらずローマ・カトリックや聖公会においても見られたことが際立っている。

ジーザス・ムーヴメントやカリスマ運動は、権威付けや霊的知恵のために叙階を必要としない大衆的な霊的運動であり [31]、過度に形式的な礼拝と暖かみのない知的信仰への経験主義的反発から、西洋において支配的だったキリスト教理解の変化を求めるものであった [32]。これらの運動は聖霊の力の体験、祈祷集会、直接的な聖書理解と解釈、直接的な神体験、奇跡や癒やし、異言の伴う聖霊のバプテスマなどを強調した [33]。彼らは信仰復興主義的であり、再臨を待ち望み、より個人的な福音理解を求めたが [34]、反面、現実逃避、情緒主義、グノーシス主義に陥りやすくもあった [35]。彼

---

25 Ibid., p.202.
26 cf., Leech, *Soul Friend.* p.15.
27 Ibid., pp.15-16.
28 Ibid., p.16.
29 cf., Ibid., p.16.
30 Ibid., p.17.
31 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.204.
32 Ibid., p.203.
33 Leech, *Soul Friend.* p.18.
34 Ibid., p.17.

らの体験主義の偏重が、無自覚的にグノーシス的な撤退をすることにつながる危うさをもつことが考えられる。その例の一つとして、この運動の参加者は、政治的闘争について関心を持たず、運動への参加後にむしろ関心が低下していることが報告されている[36]。

1.3. 社会正義への意識の高まり ― 解放の霊性

現代の霊性に影響を与える流れとして、20 世紀になりはじめて明確に社会正義に深く関わる霊性として登場した[37]解放の諸霊性を欠かすことはできない。先に述べた二つの潮流が個人の内的変容を重視するのに対し、この潮流は社会変革を追求する異なった強調点を持つ。解放の神学は、1960 年代後半ラテン・アメリカでカトリック司祭のグスタボ・グティエレスを中心として興り、当初は彼ら自身の国の神学的発展のために用いられていた[38]。この神学を代表する著書『解放の神学』においてグティエレスは、信徒が中心的に運営するキリスト教基礎共同体（Basic Christian Community）において、神の愛を説こうとした自らが反対に彼らから教えられたことを記すとともに、神の国である正義と真理を証しする預言者的歩みは、個人的でなく共同体の一員としての共同体的業であると訴える[39]。

この神学の主張する解放とは、究極的には罪からの解放に関連している。その罪とは内面的罪にとどまらず社会的・政治的な罪、不正、弾圧、差別、搾取といった罪からの解放でもある。これらの罪からの解放によって、人は真理・正義・平和・愛に基づく、より人間らしい社会へと解放されると理解する[40]。人間の解放という解放の神学の普遍的性質が知られるにつれて、次第に同様の関心をもつ西洋の運動を表現するためにも広く用いられるようになっていった。

これらの特徴により、彼らの霊性もあらゆる形態の不正な構造に対する批判とそれを克服しようとする闘いに基づく[41]。しかし、彼らの霊性の核心は、関連付けてしばしば批判されたマルクス主義ではなく聖書であり、特に出エジプトに導く神や十字架と復活を通して表された死に対する勝利といったテーマである[42]。また、グティエレ

---

35 リーチは、カリスマ運動の主要な指導者の一人である聖公会司祭マイケル・ハーパーが「このペンテコステ派的立場は特にグノーシス的逸脱に傾いたり受け入れたりしがちである」と自らその危険性を認めていたことを紹介する。cf. Ibid.p.18.

36 Ibid., p,17.

37 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.187.

38 Leech, Soul Friend. p.19.

39 Gustavo Gutierrez, *A Theology of Liberation: 15th Anniversary Edition, trans.* Caridad Inda and John Eagleson, Revised edition. (ORBIS, 2012).

40 山田經三 , “ 第 2 バチカン公会議と解放の神学に基づく世界の平和 ,” 上智経済論集 58, no. 1・2 (2013): 1–5.

41 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.188.

42 Ibid.

スは著書『我らは自らの井戸より飲む』においてその霊性について[43]、霊性、神学、社会実践は連続体であることを強調する。解放の神学は、神不在のように見える世の中にあっても、私たちの住む世界において「共にいる」ということが、聖なる現実と「共にある」ことでもあると、サクラメンタルなものとして再発見しようとする願いと試みである[44]。このような解放の霊性に共鳴するものとしてフェミニスト神学やテゼ共同体、また個人ではカトリック司祭ヘンリ・ナウエンも挙げられる。

一方で、リーチは自ら社会問題に関わりつつも、社会問題や政治的相克に深く関わるラディカルなキリスト者は彼らの霊的ルーツとのつながりを失う大変危険な状態にあると指摘する[45]。彼は 20 世紀のキリスト教神秘主義著作家であるイーヴリン・アンダーヒルを引用しつつ、解放の神学の霊性は浅はかな宗教性へと陥る危険性を持つと警鐘を鳴らす。なぜなら誤って実践的キリスト教と呼ばれる倫理的敬虔さは、生の痛みや神秘などが最も深く感じられるつらい場面にある人間の魂にはほとんど意味をなさないからである[46]。

2．霊性のもつ共同体性

すべてのキリスト者が聖性へと招かれているとする第 2 バチカン公会議の理解を経て民主化した霊性は、これまでに見られないほど変化と多様性に富む展開を見せている[47]。しかしそれらの内には自己陶酔的な霊性、つまり自己修養、個人的啓発、意識の高揚といった、つきつめれば自己実現のための霊性という一面も見られる[48]。これは、民の救いや聖化を強調する聖書的伝統よりも、自己認知や啓発に関心をもつ古典的グノーシス主義により近い[49]。次にそれぞれの霊性の潮流のもつ豊かさと脆弱な点、共同体性について考察する。

2.1. 内的探求における霊性の個人主義と共同体性

先に取り上げた 3 つの潮流の内、特に内的探求やリトリート・ムーヴメントに見ら

---

43 Gustavo Gutiérrez, *We Drink from Our Own Wells: The Spiritual Journey of a People,* 20th Anniversary Edition. (Maryknoll, NY: Orbis Books, 2003).

44 Leech, *Soul Friend.* p.24.

45 Ibid., p.28.

46 Ibid.

47 本稿では扱うことができなかったが、他にテゼ共同体やフェミニスト神学の霊性も特徴的である。Sheldrake, History. pp.190-197.

48 リーチはそれどころか現代の霊性の多くが自己陶酔的であると指摘する。Kenneth Leech, *Spirituality and Pastoral Care* (Cambridge, Mass. : Cowley Publications, 1989).p.8.

49 Ibid.

れる神秘主義的潮流は、多くの人が自己の私的な世界に隠棲し、そこで自分自身の人格的成長に病的に没頭するようになっている現代アメリカの社会的背景に対して[50]、キリスト教的受け皿として応えていると言える。一方でこの潮流は、受肉した御言葉における私たちの生の全体的変革よりも慰めや安心、内面の平安を提供することに関心をもつ傾向があるため個人的側面が強いとも見なされる[51]。

ベナーの霊性理解に照らし合わせると、いくつかの側面が脆弱であることは否めない。特に苦難から逃避した平安を求める傾向にあるこの流れは 7「苦難の中でその人特有に成長させられる」点に弱く、また 8 や 9 の共同体性が軽視される傾向がある。彼らが求める「真の自己」の探求は、他者から切り離されて追求されるとき、実際には人を自己陶酔から自由にしたり、あるいは他者への愛に向かって自由にしたりはしないということが往々にして起こるのである[52]。この潮流は霊的折衷主義に陥りやすいことが指摘されたが、まさに、キリスト教的霊性、つまり聖書や礼拝、信仰共同体から離れることによって、達成感、幸福感、満足感、自己強化といった欲求に対して判断基準を持たなくなり、彼らのバランスを失わせ結果的に自己中心的な霊性へと誤って導かれる可能性が生じるのである[53]。たとえばマートンに共感したヘンリ・ナウエンは観想的神秘主義に関する著書も多く著しているが、彼が解放の神学が展開される中南米へと向かったのも、西洋の自己に囚われすぎる文化の中で自らの霊性が不健全になることに警戒したということも一つの理由であろう[54]。

ただし、キリスト教霊性における内的探求を強調するこの霊的潮流は個人的な側面は強くとも、私的なものではない。観想的神秘主義は、しばしば最もキリスト教霊性の中で内的な形式だと解釈されがちであるが、たとえばアンダーヒルのような評価されている神秘主義者は明確に個人主義や内的生活にとどまることを否定し、むしろ霊性は外に向かうように人を駆り立てるものだと定義する[55]。最も優れた 20 世紀の霊的作家だと評されてきたトラピストの修道司祭トマス・マートンも同様の点に注意する[56]。彼は霊的同伴（Spiritual Direction）、リトリート・ムーヴメント、神秘主義に

---

50 Susanne Johnson, *Christian Spiritual Formation in the Church and Classroom* (Nashville, Tenn.: Abingdon Press, 1991).p.17.

51 cf., Leech, Spirituality and Pastoral Care, p8.

52 cf., Johnson, p17.

53 cf., Sheldrake, *Explorations in Spirituality.* p.4.

54 cf., 徳田信 , “ 現代聖餐論における「キリストのからだ」— ヘンリ・ナウエンを中心に —,” 基督教研究 80, no. 2 (2018): 29–48.

55 Sheldrake, *Explorations in Spirituality.* p.135.

56 Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.185.

多大な影響を与えたが[57]、自室で内的に探求しただけでなく、教会中心的な霊性から世俗世界に大いに関与するものにいたるまで幅広く著述した[58]。極めて観想的であるマートンの自己の探求が同時にカウンターカルチャー的であるのは、個人主義的な文化が蔓延している中で、自己とは他者との連帯における「交わりの中」にのみ真に存在するものであるという確信を深めていった点である[59]。そして、彼の言う真の観想 (contemplation) は、私たちを真実に直面させる。マートンは、霊性が葛藤と苦闘の回避といった偽の内面的自己陶酔とは何の関係もないことを明確にしていた[60]。

内的探求の霊性の潮流において、人々のニーズはヨガや超越瞑想など雑多な方向へ向かったが、社会に受容され理解されたものとは異なって、キリスト教的霊性はこの潮流の中にあっても共同体的性質を個人的性質と同じく強調していたことが明らかとなる。その固有な霊性は、真の共同体のためにも一人、あるいは特定の時間と場において静まった観想が不可欠であると再評価した点が顕著である。

2.2. カリスマ運動の霊性における問題と共同体性

20 世紀初頭に起こったペンテコステ運動では聖霊のバプテスマに伴う異言が特に強調されたが、1960 年代以降起こった複数の教派が参与するカリスマ運動においては、異言は一つの特徴であったが必ずしも伴うものではなかった。むしろ、より運動全般に特徴的であったのは祈祷集会であり、これに伴っていくつかの霊的豊かさが現れた。それは祈りにおいて神の臨在と力をより深く感じることやその証言が増したこと、聖書が生きた力を持っている感覚、キリスト教共同体における暖かな交わり、様々な霊的賜物を尊び感謝すること、そして個々のキリスト者の性格の変容などである[61]。

特に本論文で注目する共同体的側面についてカリスマ運動は、中にはコミューンで共同生活を営むものが見られるほどキリスト教共同体内での霊的成長を重んじたことは注目すべき点である[62]。彼らはメンターシステムを設けるなど共同体内でその霊的成長を支える充実したシステムを持つが、その一方でこの霊性が現実逃避的、宗教的避難所のような役割として指摘されるように[63]、福音化に熱心でありながらも集団内

---

57 スィアーズは当時の観想的運動の注目度を記述している。特にマートン及び、彼と親交のあったヒンソンの授業は極めて人気であった。Johnny Sears, “Contemplation in a World of Action: Thomas Merton, Douglas Steere, E. Glenn Hinson, and The Academy for Spiritual Formation,” *Baptist History and Heritage* 53, no. 1 (2018): 68–79.

58 彼の著書『七重の山』と『やましい傍観者の憶測』がそれぞれの例として挙げられる。Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* pp.185-186.

59 Sheldrake, *Explorations in Spirituality.* p.128.

60 Ibid., p.137.

61 Leech, *Soul Friend.* p.27.

62 cf., Sheldrake, *A Brief History of Spirituality.* p.203.

63 Leech, *Soul Friend.* p.19.

の内向的志向性を持った霊性の傾向を持つと言えるだろう。

また、ベナーのキリスト教霊性の特徴を参照すれば、5「自己についての深い理解を要求する」や 6 の「私たちがあるべきだと神が任ずるユニークな自己の結実へとつながる」ことに関してはより脆弱であると言える。第一コリント書 12 章から 14 章においてパウロが指摘するように、カリスマ運動においても異言が優位に立つのではないことが注意深く理解される。しかしなお、特定の事象が強調される中で個々人の霊性がその人らしく全体的に統合されるというよりも、ある特定のヴィジョンを志向する傾向がある。すなわち、カリスマ的な力や聖霊の働きの顕現、奇跡や癒やし、キリストに似せられていく聖化は強調される一方、神に造られたユニークな全体的な存在へと統合されていくということはあまり強調されなかったと考えられる。たとえば、シンガポールにおける現代のカリスマ運動では、癒やし、異言、預言を行うことができるようにと訓練が行われ、多くの病の根源的原因は罪であるとする応報思想と現世利益的な信仰が見られる[64]。また、より卑近な例では、筆者が病院チャプレンをしていた頃に出会ったペンテコステ派教会に属する患者やその家族の中には、癒やしが見られないのは祈りが足りないからだという自己理解がしばしば見られた。これらから、カリスマ運動における霊性は、キリスト教共同体内で育まれるシステムと資源に支えられ豊かな霊的証言も持つが、その本質から逸れるとき、固定化した理想と弟子像へと誤って導かれる危うさを備えていると言える。

2-3. 解放の霊性における課題と共同体性

解放の霊性は、当時のキリスト教霊性に多大なインパクトを与えた。周縁化されている人々や社会や政治の不正義に抑圧されている人々や搾取・貧困・飢餓の中にある人々と連帯して社会変革に積極的に参与していく解放の神学は非常にラディカルであるが、その拠り所は聖書と霊性の歴史であるとして、その印象に反して伝統に根ざしているものであった[65]。

また、解放の神学は当初から霊性の問題、特に復活されたキリスト・イエスに従うという弟子性を関心事としてきた。私たちは皆、人々と深く霊的に交わりつつ共に生きるべく召命を受けていると理解する解放の霊性は、貧しい人々の経験から、従うべき道を示す主との出会いが生じると主張する。よってこの潮流において共同体側面はもっとも中心的なものである。解放の霊性の主唱者であるグティエレスは、共同体の生活が神の支配に対する感受性を養い、共同体の中でのみ私たちは主の賜物と恵みを

---

64 杉井純一 , “ シンガポールのカリスマ運動 ,” 宗教研究 82, no. 1 (2008): 1–23.
65 Gutiérrez, *We Drink from Our Own Wells.* p.32.

聞き、受け入れ、宣言することができると論じる[66]。

同時に彼は、共同体は孤高（solitude）を経たものであることが重要だと強調する。共同体はそれぞれが孤高の経験を通ることによって交わりへの渇望を生み、真の共同体へと導かれるのである[67]。孤高の期間は耐えることは難しいものであるが、そのような砂漠の中の孤独の経験が神の支えと導きのみを受ける信仰の旅となる。私たちの孤独の中で、主が私たちにやさしく語りかけ、忠実さを求め、また慰めるのである[68]。このような神秘主義的・観想的信仰にも深く共感するグティエレスは、神が砂漠に呼ぶのはそこで私たちが果てしなくさまようためではなく、約束の地に到達するために通らせるのだと記す。この孤高の砂漠を通ることによって、神を父として知る人々の乳と蜜の溢れるような豊かな共同体が形成されていくのだと。更に、砂漠を横断するためにも共同体の支援が不可欠であると言及する解放の霊性は、究極的には常に共同体志向である点において際立っている。

以上に確認されたように、グティエレスは、その霊性において共同体を強調すると同様に一人観想的に過ごすことの重要性を強調する。しかし、これが大きな潮流となった時に、そのバランスを崩し、批判のとおり単なる倫理的社会活動へと陥る可能性を持つと考える。そのような誤った理解に陥ったとき、ベナーの霊性の特徴を参照すると、カリスマ運動と同様 5「自己についての深い理解を要求する」や 6 の「私たちがあるべきだと神が任ずるユニークな自己の結実へとつながる」ことに関してないがしろにした、自己を神との関係において省みることのない社会運動へと逸れていくことが考えられる。

2.4. キリスト教霊性の共同体性

日本においても霊性やスピリチュアリティと聞くと、実存的、内的世界の探求のような印象が持たれることが多い。しかし、そのような昨今の「霊性（スピリチュアリティ）」は内面だけを扱う部分的な理解の霊性であり、人々をますます孤立主義・私的な霊性へと逸らすのみである。この類の霊性は、共同体で育まれることや社会へと向かわせる等のベナーの挙げるキリスト教霊性の特徴を持たず、マートンが主張するように自己は他者との連帯における交わりの中にこそ存在するという理解とも相容れない。純粋に内面だけの霊性というものがあるとすれば、それは「自己全体と神との関係」というキリスト教霊性理解とは質を異にするものである。

昨今の一般的霊性と異なり、キリスト教の霊的形成においては、人は信仰共同体と

66 Ibid., p.133.
67 Ibid., p.132.
68 Ibid., pp.128-129.

の関係なしに霊的に全体的な者となり得ない。明白な事ながら、キリスト者の信仰は聖書を個人で読むことによるのでなく、共同体の文脈や信仰の伝統から離れては成り立たないからである。したがって教会は霊性に関してもその成長を守り、肯定し、促し、また祝うことにおいて欠かせないものである[69]。キリスト教霊性は、私たちの努力にかかわらず聖霊がイニシアティブを持つ恵みによるものであるとの理解は肝要であるが、それはただ与えられるだけでなく、地域の教会共同体の中で具体的に学んでいくリアリティでもある。そのため、私たちは参与へと招かれている。すなわち、イエス・キリストに従う道、弟子性（discipleship）や聖化が深く関わってくる[70]。

参与というとき、共同体の信仰への参与という側面があるが、スザーン・ジョンソンはキリスト教的霊性が形成される教会について、エフェソ 2:19 に登場する神の家族としての伝統的理解から論じる。家族は人格が形成される環境であって、そこでは私中心主義にも個人主義にも陥ることなくユニークさや個性を育むことができる[71]。ジョンソンは教会共同体を理想化しているわけではない。この家族は既に和解されたものでなく、むしろ苦労しつつも分かち合うことを学ぶ、和解しつつある共同体であることを理解している[72]。そのため、神の家族としての教会共同体は、外界からの避難所、慰めの城、公からの逃れの場所、同じ考え方を持つ人々の調和のある避難所のような「ユートピア」ではなく[73]、快適さと不快さ、親しいものと見知らぬもののいずれをも含んでいるものである[74]。つまり、霊的形成において不可欠である信仰共同体は、キリスト者一人ひとりにとっての霊的な資源であるだけでなく、それそのものが霊的形成の過程が形として現れる場でもある[75]。

神の赦しを絶えず必要とする限界のある共同体でありながら、神の家族に加えられる神秘は、キリスト者を聖書の物語の一人へと位置づける参与を求め、また神の国への参与へと招く[76]。そのため、真のキリスト教的霊性は信仰共同体で育まれ支えられ、そこで表現されると同時に、それは開かれたものであって神が創造しかつ愛するすべてとの交わりや連帯へと私たちを導くのである。私たちはただ単に共同体を通じて恵

---

69 cf., Benner, *Care of Souls.* p.107.

70 弟子性はグティエレスが霊性の中心的概念として捉えたものであるが、解放の霊性の方法とはまさに「方法」が *hodos* (道) に由来しているように、ラテン・アメリカの貧しい人々と共にある際にもイエスに従うという文脈の中、また聖霊に従って歩んでいる時にのみ、すべての人に対する神の無償の愛を知りまた宣言することができると結論づけ、解放の神学の実践においていかに霊的であることが重要と考えられているかが伺える。Gutiérrez, *We Drink from Our Own Wells*. p.136.

71 cf., Johnson, *Christian Spiritual Formation in the Church and Classroom.* p.81.

72 Ibid., p.82.

73 Ibid.

74 Ibid., pp.82-83.

75 Ibid., pp.85-86.

76 see for example: Ibid., Chapter 6.

みを受けるだけでなく、ジョンソンの主張するようにこの世に向かってまたこの世において恵みのしるしを伝えもし、また、グティエレスの主張するように人々から受けもするのである。

霊性の本質は聖なる世界に逃げ込むことでもなく問題から逃避し神と共に安逸をむさぼることでもない。地域の中の人々と共に悩み苦しむ共生の中で培われるものである [77]。つまり、キリスト教的霊性の持つ共同体性は、先に述べた観想運動が誤って陥る私的・個人的な自己実現のための霊性を退けるものであり、またカリスマ運動が誤って陥る共同体に退いて現実逃避的に陶酔するものとも異なる。

なおかつ、共同体性を強調する解放の霊性が同じく強調したように、キリスト教霊性には砂漠を通る孤高（solitude）のとき、すなわち観想的神秘主義的霊性をも求められている。ある一定期間であっても人は共同体から退き、日常で囲まれている資源からも遠ざかることによって神と一対一の時を過ごし、そこでこそ気付かされる神の臨在と恵み、また深められる自己理解があるからである。

信仰共同体がいかに健全であっても、私たち自身が共同体的アイデンティティに埋没して自らの深い心の声に耳を傾けていないことが起こり得る。それは私たちを私たちとして作った主なる神をないがしろにすることでもある。霊的な存在として作られ、その内には既に聖霊が働いている故に、私たちは内なる声、私たちの内に住みたもう聖霊の声を静まって聴くことは霊的形成において不可欠である。

さらに観想的な霊性、つまりリトリートや霊的同伴といったより個別的な霊的実践の必要性として、共同体においては打ち明けることのできない告白があり得る。内なる真実への旅は一人で行くにはあまりに過酷で、その道のりは同伴者なしに旅するにはあまりに深く隠され、その目的地は独りで成し遂げるにはひるんでしまうものであるかもしれない。しかし、同伴する人や受け入れ安全を確保してくれる人の存在は、私たちに静まって聖霊の声に耳を澄ますことを得させ、聖霊が招くまだ見ぬ土地へと進む力を与えるのである [78]。

以上より、キリスト教の霊性の形成において共同体と観想的な実践の両者が相互に影響し合う不可欠な側面であることが確認された。グティエレスが論及するように、キリスト者の霊性において孤高の時は避けて通ることはできないが、そのような砂漠の時を歩むにも共同体の支えなしには不可能であること、本質的にキリスト者は共同体において霊的に形作られるものであることがより鮮明になった。キリスト教霊性は、

---

77 cf., 松平功 , “ 司牧者の霊性と働きの一考察 ,” 桃山学院大学キリスト教論集 , no. 49 (2014): 159–188.

78 Parker J Palmer, *A Hidden Wholeness: The Journey toward an Undivided Life : Welcoming the Soul and Weaving Community in a Wounded World* (San Francisco, CA: Jossey-Bass, 2004). p.26.

自己全体と神との関係とそのあり方である故に、共同体的霊性と観想的霊性の両方の過程をとおしてより全体的な者へと形成されていく。これはキリストに似た者とされる (2 コリント 3:17-18) ことに関連する変容であるが、このことは完璧になることを意味するのではない。むしろ、自らの破れをも抱擁する、より統合された者とされていくことである [79]。

弱さを含むより全体的な者とされることとは、より全体的に神と和解されていくこととも言える。また、より聖霊に深く根ざした関係へと育てられると言うことができるが [80]、このような霊的形成を通して、人は召命を与えられ、固有に与えられる宣教の業へと派遣されていくのではないだろうか。そのあり方は、世俗社会から隠棲するあり方とは反対に、世界に参与していくあり方である。

おわりに

本研究は現代の霊性への関心の高まりに影響している第 2 バチカン公会議以降の 3 つの霊的潮流、内的探求、カリスマ運動、解放の霊性を概観した。

既存の宗教への幻滅と関心の低下を背景に、人々は人生の内的意味や真の自己の探求といった内的探求に惹かれた。このような求めに対してキリスト教会はリトリートや霊的指導といった実践によって応答し、現代のキリスト教霊性が観想的な霊性の豊かさを再び認識することに貢献した。特に内面的、また神秘主義的な特徴をもつこの潮流には共同体的側面は目立たないが、トマス・マートンなどの主唱者は霊性が世界と関わり交わりの中にあることの重要性をはっきりと認識し、指摘していた。

次に、カリスマ運動は、形式的、知的偏重の当時のキリスト教会に反発して直接的信仰体験への欲求を背景に、ジーザス・ムーヴメントなどの形でアメリカに起こった。この運動は初期キリスト教会への回帰を願い、直接的な聖書理解や、奇跡、癒やし、聖霊のバプテスマの伴う異言、祈祷集会を重んじ、それらはすべて共同体において行われた。神の臨在をより深く感じる等の体験的霊的豊かさが見られたが、反面共同体へと引きこもる現実逃避的傾向が批判された。

3 つめの解放の霊性は、人々の正義や平和への関心の高まりを背景に、グスタボ・グティエレスらを中心としてラテン・アメリカから起こった。これは上記 2 つが内的変容を重んじるのに対し、社会の変革を含む解放を重要な使命とすることに大きな特徴がある。貧困や不正による抑圧からの解放を含む人間の全体的な解放を目指すこの

79 Ibid., p.5.
80 cf., Benner, *Care of Souls.* pp.94-108.

神学の霊性は、マルクス主義への接近を批判され、その潮流としては単なる倫理的敬虔へと陥ることの懸念が見られるが、グティエレス自身が重きを置いたのは聖書と霊的伝統に基づくことであった。人々と共にある霊性でありつつも、グティエレス自身は孤高（solitude）の不可欠さを認識し、訴えていた。

これらを概観することによって第 2 バチカン公会議をはじめとして、いずれの潮流にもその強調点の差はありつつも、キリスト教の霊性は、育まれ、共有され、発現されるのにおいても本質的に共同体的であることが確認された。同様に、ほとんどの霊的潮流において観想的な孤高（solitude）にある霊性も等しく重要であることが主張されていたことが印象的である。この両面を通してキリスト者は神につくられたより全体的な者とされ、固有の召命をもって宣教の業へと派遣されていくのである。今後の研究としては、本論文で扱った潮流の影響を受けつつ 21 世紀に入りより広く展開されている霊的形成や霊的同伴という霊的実践について検討していくことが求められるだろう。

参考文献

Benner, David G. *Care of Souls: Revisioning Christian Nurture and Counsel.* Grand Rapids, Mich.: Baker Books, 1998.

Biola University. *The History of Spiritual Formation - James Houston and Bruce Hindmarsh.* YouTube movie, 2014. https://www.youtube.com/watch?v=aY2s6KDnGII&list=WL&index=17&t=0s.

Gutierrez, Gustavo. *A Theology of Liberation: 15th Anniversary Edition.* Translated by Caridad Inda and John Eagleson. Revised edition. ORBIS, 2012.

Gutiérrez, Gustavo. *We Drink from Our Own Wells: The Spiritual Journey of a People.* 20th Anniversary Edition. Maryknoll, NY: Orbis Books, 2003.

Johnson, Susanne. *Christian Spiritual Formation in the Church and Classroom.* Nashville, Tenn.: Abingdon Press, 1991.

Leech, Kenneth. *Soul Friend: Spiritual Direction in the Modern World.* Harrisburg, PA: Morehouse Pub., 2001.

———. *Spirituality and Pastoral Care. Cambridge,* Mass: Cowley Publications, 1989.

Mulholland, M. Robert, and R. Ruth Barton. *Invitation to a Journey: A Road Map for Spiritual Formation.* Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2016.

Palmer, Parker J. *A Hidden Wholeness: The Journey toward an Undivided Life : Welcoming the Soul and Weaving Community in a Wounded World.* San Francisco, CA: Jossey-Bass, 2004.

Sears, Johnny. “Contemplation in a World of Action: Thomas Merton, Douglas Steere, E. Glenn Hinson, and The Academy for Spiritual Formation.” *Baptist History and Heritage* 53, no. 1 (2018): 68–79.

Sheldrake, Philip. *A Brief History of Spirituality*. MA: Blackwell Publishing, 2007.

Sheldrake, Philip F. *Explorations in Spirituality: History, Theology, and Social Practice.* New York; Mahwah,

NJ: Paulist Press, 2010.

山田經三 . “ 第 2 バチカン公会議と解放の神学に基づく世界の平和 .” 上智経済論集 58, no. 1•2 (2013): 1–5.

徳田信 . “ 現代聖餐論における「キリストのからだ」— ヘンリ・ナウエンを中心に —.” 基督教研究 80, no. 2 (2018): 29–48.

杉井純一 . “ シンガポールのカリスマ運動 .” 宗教研究 82, no. 1 (2008): 1–23.

松平功 . “ 司牧者の霊性と働きの一考察 .” 桃山学院大学キリスト教論集 , no. 49 (2014): 159–188.

The Holy See, “Lumen Gentium.” Accessed November 26, 2020. http://www.vatican.va/archive/hist_councils/ii_vatican_council/documents/vat-ii_const_19641121_lumen-gentium_en.html.

【Abstract】

A Study on the Growing Interest in Contemporary Spirituality and Its Communal Nature

UEDA Naohiro

Since the mid-20th century, there has been a growing interest in spirituality in Christian churches, especially in Protestant churches. This has developed especially after the Second Vatican Council, but the concept still seems vague in its understanding. This study examines the post-Vatican II spiritual currents to clarify contemporary Christian spirituality and explore its communal nature. The methodology is a literature study with Philip Sheldrake and Kenneth Leech as the primary references. This study takes up three spiritual currents regarding their classification. They are (1) the inner quest, (2). the charismatic movement, and (3) the spirituality of liberation. By reviewing those backgrounds and characteristics, we examine their prominence and vulnerability, as well as their communal nature.

As a result, (1) the inner quest is associated with contemplative spirituality, retreats, and spiritual guidance, which are highly internal practices. However, the primary advocate, Thomas Merton, pointed out the importance of communion and solidarity with others. (2) The charismatic movement gave people a direct faith experience and helped them feel closer to God, making their faith alive. The communal aspect of this spirituality is the emphasis on spiritual growth within the community. It provided a richer and more direct faith experience and promoted spiritual formation. On the other hand, there were concerns about falling into an inner spirituality within the community. (3) the spirituality of liberation we saw has the unique characteristic that differs from the above two, which is actively involved in social change. This spirituality, which is deeply concerned with justice and peace, occurred in Latin America, mainly led by Gustavo Gutierrez. While he emphasized communal solidarity, he placed an equal emphasis on solitude. However, this kind of spirituality tends to weaken its contemplative aspect, and it can be said that the movement becomes meaningless when it merely becomes an ethical and social movement.

This study recognizes that the community is where Christian spirituality is nurtured, shared, and expressed. It was confirmed that we Christian are essentially living in community, but it is equally essential to be placed in solitude for a certain period. As our spirituality is cultivated, both in solitude and in community, we are sent out into community and society as more whole persons, including our own weaknesses, with a new calling, under the influence of the Holy Spirit.